

都市における歴史的景観特性の 把握手法に関する研究

Research on methods of understanding Urban Historic Landscape Characterisation

(研究期間 令和4年度～令和6年度)

社会資本マネジメント研究センター

緑化生態研究室

Research Center for Infrastructure Management

Landscape and Ecology Division

室 長

Head

研 究 官

Researcher

飯塚 康雄

IIZUKA Yasuo

飛田 ちづる

TOBITA Chizuru

This study shows methods for the preparation of basic data for local municipality and how to use the documents to promote the preservation and utilization of historical resources across the municipality. In parallel, it indicated specific cases with public cooperation and public awareness-raising necessary for community development using historical resources.

〔研究目的及び経緯〕

本研究は、平成20年施行の「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）」に限らず、日本国内の文化財等を含む歴史的資源の保全と活用への取り組みを促進する技術資料案の作成を目指している。

平成16年に景観法が施行され、我が国の都市、農山漁村等における良好な景観の形成を促進するため同法に基づく景観計画が各景観行政団体により策定されるようになった。一方で、前出の歴史まちづくり法は、地域の特徴を捉えて、歴史的資源の保全と活用を促進する点が景観法と異なる。その他、文化財保護法の重要伝統的建造物群保存地区制度、文化財保存活用地域計画や日本遺産など多様な制度等が整備されている。

他方、保全と活用の網のかけられていない歴史的資源等も散見され、地域の特徴を示す貴重な資源の保全と活用を進めるためには、自治体全域で有形、無形の資源を把握し、まちづくりとともに保全と活用の方法を周知、促進する必要がある。そのために、歴史的資源の所在を示し、主に歴史的資源の保全と活用を担う文化財担当部署と、自治体の都市整備を担う都市計画担当部署、その他観光や道路等、複数の部署と話し合える資料を作成し、検討方法を提示する必要がある。

本研究では、自治体全域の歴史的資源の把握を行い、他部署との連携等を行う際の基礎資料の作成を行う手法と、資料の用い方を示す技術資料（案）を作成した。

〔研究内容〕

（1）歴史的景観アセスメントの手法の開発

本研究を進めるにあたり、1990年代に英国の考古学者が考案した手法であるHLC(Historic Landscape Characterisation)を参照した。日本では鎌倉市等の事例を用いて紹介されている¹⁾。

同手法を元に、最新版の地図を基礎として時代を遡りながら地図を重ね合わせ、図1のように色の濃い場所を、変化のない場所として特定し、歴史的資源や歴史的景観の所在を把握する手法を地図等の資料を用いて試行した^{注1)}。その結果について、歴史的資源等の位

置が示されていることを、既存の調査や計画等から照合した。また、歴史的資源等の保全と活用に関する制度の運用状況も地図を重ねた。この一連の作業を、英国に倣い日本版HLCと呼んでいたが^{注2)}、資料（案）作成に際し、作業の目的をわかりやすく示すため名称を歴史的景観アセスメントに変更した。また、同じ作業を、日本の自治体の特徴や法令の運用状況等から選んだ20の自治体で行った。さらに、自治体の歴史的資源を活かしたまちづくりに取り組む担当者に同成果の活用可能性を聞き取った。その上で、同地図を、保全と活用に活かすところまで示すため、地図の読み解き方を示すことにした。

（2）技術資料（案）の作成

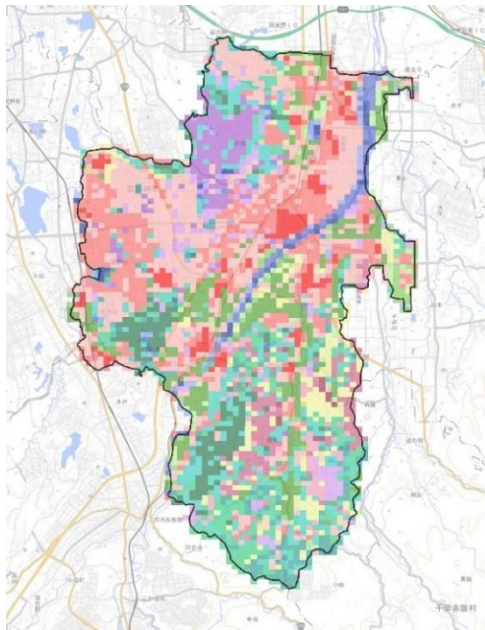
自治体の調査と既存資料から、歴史的資源を具体的に示すのではなく、歴史的景観特性を示す基礎情報と既存の法令等の運用状況から、歴史的資源等の保全と活用に取り組む意義や考え方を、庁内の関連部署に示したり、関連部署の計画策定の際に参考にしたりする活用を考えた^{注3)}。

まず、国内で入手できる地図を示し、同時に各種制度等の手引きなどを示した。次に、地理情報システム（以下、GIS）を用いた手法と用いない手法を並列して示した。そして、結果として表される地図の読み解き方の例を示した。最後に、歴史的資源の保全と活用に必要な庁内の連携、住民への普及啓発や住民との連携の具体事例を、調査対象とした20の自治体において示した。

〔研究成果〕

（1）歴史的景観アセスメントの手法の開発

富田林市を例に説明する（図1）。GISを用いて行う場合、始めに自治体全域の土地利用の変遷を見るため、国土数値情報ダウンロードサイトから平成28年、昭和5年の「土地利用細分メッシュ」を用いた。また、明治41年のデータは、国土数値情報ダウンロードサイト土地利用分類図（第1期）「大坂東南部」「岸和田」を用いた。更に、植生情報を加えることで、当該自治体の生



田	1900年頃以前	建物用地等	1900年頃以前
田	1970年代以前	建物用地等	1970年代以前
田	1970年代以降	建物用地等	1970年代以降
畑	1900年頃以前	荒地・海浜	1900年頃以前
畑	1970年代以前	荒地・海浜	1970年代以前
畑	1970年代以降	荒地・海浜	1970年代以降
果樹園等	1900年頃以前	水域	1900年頃以前
果樹園等	1970年代以前	水域	1970年代以前
果樹園等	1970年代以降	水域	1970年代以降
森林	1900年頃以前	その他用地	1900年頃以前
森林	1970年代以前	その他用地	1970年代以前
森林	1970年代以降	その他用地	1970年代以降
植林地	1970年代以前		
植林地	1970年代以降		

活用の一例

地図を用いた時代から現在まで残る場所を知ることができるため、市の歴史と合わせて、歴史的資源（※1）の場所を確認し、道路等の計画に活かす、現在の生活と関連づけて地域住民への周知内容の検討、観光資源としての活用方策等を考えられる。※1 有形無形の文化財を含む城郭や住宅、地域の特徴を表す事物としている。

図1 歴史的景観アセスメントの結果例(大阪府富田林市)

色の濃い場所が、長時間変化のない場所である。図は、全国に整備されている地図を用いているため、1900年頃まで遡る。絵図などを用いて江戸時代以前まで遡ることで、歴史的資源のより包括的な保全・活用が検討できる。なお、実際に地図を解釈する際は、資料調査や現地調査等に基づく裏づけが必要であり、資料（案）においては、例を示すのみである。

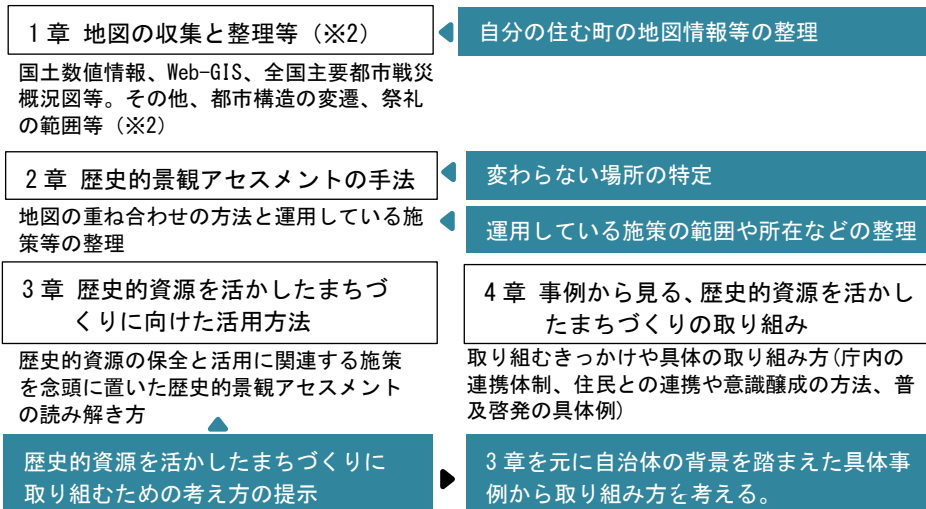


図2 技術資料案の構成案

（※2）自治体の文化財担当者には既知の情報であるとの指摘も受けるが、分野の異なる担当者に提示するために必要な整理として示した。

業との関連などが見られることを想定して自然環境調査 Web-GIS から平成 12 年及び 13 年、昭和 48 年のデータを使用した。次に、歴史的資源の保全と活用に関する法令等として整理した中から、同市で運用されている法令もしくは策定されている計画の対象範囲を重ね合わせた。富田林市においては、文化財保護法の重要伝統的建造物群保存地区、都市計画法の市街化区域、都市再生特別措置法の都市機能誘導区域、居住誘導区域が該当した。最後に自治体の歴史を踏まえた結果の解釈を考えた。なお、図 1 の地図は、色の判別を重視し、関連する法令等は示していない。

（2）技術資料（案）の作成

資料（案）は、自治体職員が歴史的資源を活かしたまちづくりに取り組む際に、市内の部署間で話しあえる

資料となる地図と、歴史まちづくり法及び関連法令を運用する際の考え方の参考例を示した（図 2）。また、調査対象とした自治体の歴史的資源を活かしたまちづくりへの取り組み事例を、市内連携、歴史的資源の直接の担い手である住民との連携、担い手育成を含めた普及啓発に分類し、具体的な目的や、地域の背景を踏まえた取り組み方と共に紹介した。

【成果の活用】

歴史的資源は、地域の特徴を示す観光資源、或いは定住促進の魅力の

一つとしての認識が高まっている。歴史的資源の適切な保全と活用を従来通り行いながら、多様な視点や手法で保全と活用に取り組むための基礎資料として取りまとめる。

【注】1 歴史学の分野では一般的な手法であるとの指摘もあるが、都市計画や観光等他部署と土地利用の不変である箇所や歴史的資源の所在、及び所在可能性等を共有するために必要な作業として示した。2 本研究では、歴史的資源と周辺の土地利用の不変性を合わせて歴史的景観特性とし、それらを把握する手法が日本版 HLC であり、技術資料（案）作成時に日本版 HLC から歴史的景観アセスメントに名称を変更した。3 作業の結果として作成される地図は、歴史的資源の更なる所在可能性、歴史的景観の可能性を示すものであるが、その妥当性や個別の歴史的資源等は調査等による裏づけが必要である。【参考文献】1) ランドスケープと都市デザイン、宮脇勝、朝倉書店 2013 年